

テーマ

# 高度成長の担い手としての 女性労働者

適用  
分野

労働経済学、計量経済学

研究  
名称

高度成長と女性労働者

氏名  
所属

上島康弘 教授  
経済学部 経済学科

内容

## ●特徴

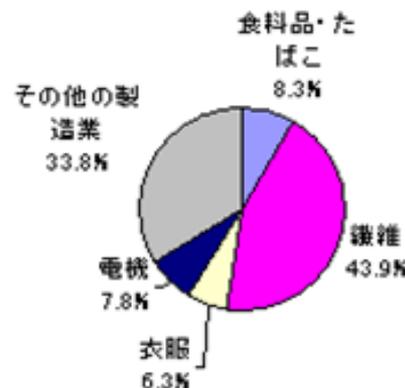
1950年代後半から70年代前半までを高度成長期とよぶ。この期間における女性労働者の貢献を成長会計の手法を使って明らかにする。

## ●研究内容

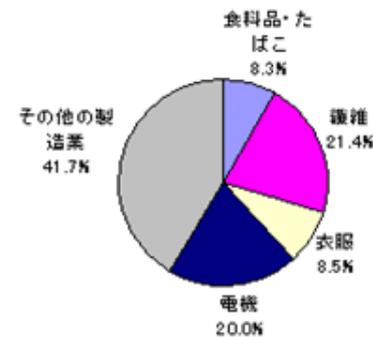
1950年代後半に始まる20年足らずの間に、日本は欧米の進んだ生産技術を取り入れると同時に、主要輸出品を繊維製品から電気製品、自動車へと転換して先進国の仲間入りを果たした。しかし、この産業転換を可能にしてくれた功労者は、実は中学校、高校を卒業したばかりの若い女性労働者たちであった。

高度成長の前半には、学校や職安を通して採用された地方出身の中卒者が就職列車で大都市に向かい、そこで振り分けられて採用された企業に引き取られていくシステム－「集団就職」－が労働力供給の面で大きな役割を果たした。たとえば、繊維業では、セーラー服を着た、まだあどけなさの残る女子中学生たちが、鹿児島県などの農山漁村からはるばる愛知県の繊維会社へ就職していった。

図A、図Bには、それぞれ1958年、1972年の、製造業における24歳以下の女性労働者の産業分布を示している。これらの図から、1950年代には若い女性の約半数は繊維・衣服業で働いていたが、経済成長が進むにつれて電機産業へと働き場所を移して、輸出立国として日本経済の発展を支えてくれたことが分かる。私の関心は、経済分析の手法を使って、彼女たちの貢献度を数字で評価することにある。



図A 24歳以下の女性労働者 1958年



図B 24歳以下の女性労働者 1972年

キーワード

高度成長、労働移動、女性労働者、集団就職

連携方法

講演  研修  研究相談  学術調査  コメント  共同研究